

# 現場から

昨年末、イスラエルとパレスチナの中学生ら17人が、福岡県宗像市のグロバルアリーナで開かれたサニックス杯福岡国際中学生柔道大会(西日本新聞などが主催)に出場するため、日本に10日余り滞在した。

## 柔道通して国際文化交流

# 予算削減“孤島化”招く

国際交流基金の要請で昨年7月にイスラエルとパレスチナを訪れ、柔道を指導したときに両チームを招待した。戦禍をくぐって練習を続ける子どもたちに



客員編集委員 加藤 暁子

「柔道を通して和の心を日本に学んでほしかった」と山下さんは言う。

来日中は、大会出場のほか、被爆地広島を訪問。広島平和記念資料館を見学したパレスチナのムアイヤ・カワスマ監督は、

「絶望の後に、努力すれば都市を再生し、繁栄させることができると語った。大牟田市の高校で交流試合に臨み、熊本県荒尾市のグリーンランドでは絶叫マシンを楽しんだ。日を追うことに打ち解ける両チームに感激した。恵まれない環境で柔道続けるパレスチナの選手はイスラエルの選手に比べ、小柄だった。来日前は柔道着さえなく、短パン姿。サニックス杯では、1回戦で敗退した後、イスラエルの旗を振って新しい友人たちを応援した。一方、イスラエルは3回戦まで勝ち進み、フェアプレー賞を受賞した。しかし、オマ

ール・アルチャデフ君(14)は試合で負けると、「優勝できると思っていたのに悔しい。もっと強くなってまた日本に来たい」と泣き続けた。この悔しさをバネにしてほしいと思った。「単に勝つことが重要ではなく、対戦相手をリスペクト(尊敬)することの大切さを選手たちは肌で感じることができ、日本の皆さんに本当に感謝したい」。日本を離れる前にイスラエルのタビデ・レズミ監督は語った。



広島平和記念資料館で爆心地の模型を見るイスラエルとパレスチナの中学生たち

「単に勝つことが重要ではなく、対戦相手をリスペクト(尊敬)することの大切さを選手たちは肌で感じることができ、日本の皆さんに本当に感謝したい」。日本を離れる前にイスラエルのタビデ・レズミ監督は語った。

古した柔道着を発展途上国に送っているが、NPOの活動には限度もある。世界の中で日本の存在感は年々低くなっている。政府と民間が協働して、発展途上国が今、どんな援助を求めているのかをきちんと調べて、血の通った支援を着実に実行していくことが大切だ。

しかし、外務省の広報文化交流予算はこの5年で3割以上も減る見込みだ。今回の両チームの招待資金は政府から得られず、企業からの寄付でやっと実現した。問答無用に事業仕分けで切り捨てしまえば、日本はさらに「孤島」となってしまうのではないかと、日本の若者が内向き志向で夢がないと嘆いているが、そうしているのは大人たちではないか。

論

考